



TITLE:

参照点構造における主観的關係と客観的關係

AUTHOR(S):

長谷部, 陽一郎

CITATION:

長谷部, 陽一郎. 参照点構造における主観的關係と客観的關係. 言語科学論集 2001, 7: 91-102

ISSUE DATE:

2001-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/66957>

RIGHT:

参照点構造における主観的關係と客観的關係¹

長谷部 陽一郎

徳島文理大学

yhasebe@tokushima.bunri-u.ac.jp

1. はじめに

参照点構造 (reference point model) は、認知文法理論における多くの理論的概念の中でも最も重要なものの1つである。参照点構造は、認識者 (conceptualizer)・参照点 (reference point)・ターゲット (target) という3つの要素と、それを結ぶ2つの心的経路 (mental path) によって構成され、われわれの言語活動の中で大きな役割を果たしている。参照点構造の重要性は、認知文法および認知言語学に関する先行研究において、繰り返し論じられてきた。²しかし、参照点構造に含まれている2つの心的経路のそれぞれがどのような特徴を持っているかについては、まだ十分に論じられていない。そこで本稿では、この問題についての考察を行う。

本稿では次の仮説を提示する。すなわち、参照点構造の2つの心的経路のうち、認識者から参照点への経路は主観的關係 (subjective relation) であり、参照点からターゲットへの経路は客観的關係 (objective relation) であるという仮説である。この仮説の妥当性を証明するには、参照点構造を持っている言語表現にあてはめてみるという作業が必要となる。そこで本稿では、英語定冠詞 the と日本語助詞「は」という、参照点構造を展開する働きを持つ言語表現を取り上げ、上の仮説に基づいた分析が可能であることを示す。

本稿の構成は次の通りである。2節では、まず、認知文法におけるいくつかの理論的概念の概要を述べたのち、参照点構造が主観的關係と客観的關係という2種類の関係を含んでいるという仮説を展開する。そして、この仮説に基づく参照点構造の図式化モデルを提案する。次に3節および4節では、2節で提案された仮説に基づいて、具体的な言語現象の分析が可能であることを示す。3節では英語定冠詞 the を分析する。特に、間接照応と呼ばれる the の用法に注目し、この用法に分類される the がどのような参照点構造を展開するかを、図式を用いて示す。4節では、日本語助詞「は」を分析し、この語もまた主観的關係と客観的關係を含む参照点構造を展開する語であり、the と共通する意味的性質を持っていることを示す。

2. 参照点構造と2種類の関係

この節では、参照点構造が一般に主観的關係と客観的關係という2種類の関係を含んでいるという仮説を構築する。この目的のために、以下では、まず参照点構造の概念について確認する。次に、主観的關係と客観的關係という2種類の関係の概念について確認する。その後、主観的關係および客観的關係と参照点構造とのかかわりについて論じ、最後に、本稿の仮説に基づく参照点構造の図式化モデルを提案する。

2.1. 参照点構造

われわれの言語活動とそれを支える様々な心的活動において参照点構造の利用が可能であるのは、われわれに、参照点を利用するための基本的認知能力が備わっているからである。基本的認知能力には、ある対象に注意の方向を向ける能力・図と地を区別する能力、心的捜査を行う能力、抽象概念を一種の「モノ」として捉える能力などがある。(Langacker 1999: Ch. 6)。

¹ 本稿は、筆者が日本英語学会第19回大会で開かれたワークショップ「主体化と意味拡張」の中で行った発表原稿に、大幅な加筆訂正を加えたものである。

² 認知文法についての基本的枠組みについては、Langacker(1987, 1990, 1991, 1999)、山梨(2000)などを参照。

このように、「基本的」な認知能力に基づいている構造であるため、参照点構造は、非常に抽象的である一方で、多様な可能性を持っている。「ある対象への心的接触がいったん確立されると、その対象と関連を持つ別の対象にも新たな心的接触を確立することが可能になる」というのが、参照点構造形成の原理であるが、この単純な心的プロセスが、われわれの言語活動において様々な形で役立っているのである。

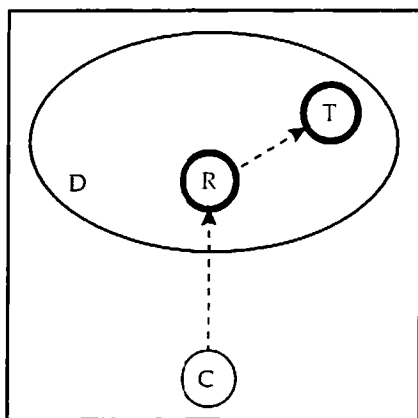


図1

認知文法では参照点構造を、一般に図1のような図式によって表している (Cf. Langacker 1999: 174)。ここでこの図式について簡単に見ておくことにしよう。まず、Cと書かれた小円は認識者 (conceptualizer) を表している。認識者とは具体的には、話者と聞き手である。次にRは、参照点 (reference point) となる要素を表している。このRを中心としてそれを取り囲むように、Dと書かれた大円が描かれているが、これはRの支配領域 (dominion) の広がりやを意味している。支配領域とは、Rと何らかの関連を持っており、Rから連想的に接近することができる要素の集合によって定義される範囲である。そしてTはターゲット (target) 要素を表している。ターゲットとは、参照点構造において、認識者によって最終的に心的接触を受ける要素である。

言語活動において参照点構造を展開する主たる目的は、ターゲット要素に対する心的接触の確立にある。図1では、CからRへと、そしてRからTへと矢印が向けられているが、これらの矢印は、心的な経路 (mental path) を示している。したがって、図1は、Cが、まずRに対する心的接触を確立させ、それに続いてTに対する心的接触を確立させるプロセスを図式化したものと言える。

以上が参照点構造の基本である。しかし、参照点構造には、現在までの認知文法研究においては詳細に論じられておらず、また図1のような図式には表されていない重要な特徴がある。このことについては後で詳しく論じるが、その前に主観的關係と客観的關係という2つの概念の定義について確認しておかねばならない。

2.2. 主観的關係と客観的關係

認知文法には関係 (relation) という概念がある。関係とは、ある要素と別の要素との間に結ばれる「つながり」である。関係はまた、主観的關係と客観的關係の2種類に分類される。主観的關係と客観的關係の違いを理解するためには認知文法における主観性 (subjectivity) と客観性 (objectivity) という2つの概念の定義を明確にしなければならない。

認知文法における主観性と客観性の概念は、認識者と認識対象とが非対称的な関係にあるという事実に基づいている (Cf. Langacker: 1985)。すなわち、認識という心的活動は、常に認識者の側に属しているのに対し、認識の対象となる要素は、常に受動的な存在であるという事実である。認識者はしばしば主体 (subject) と呼ばれ、認識対象は客体 (object) と呼ばれるが、こ

のことは両者の間に存在する非対称的関係をよく表していると言える。

しかし、主体と客体との関係は、決して固定的なものではない。非対称的であるという条件のもとで、この関係の性質は場合によって様々に変化し得る。例えば、主体が客体を認識する際、認識者としての自らについての意識は希薄になることが多い。このような状態における対象認識活動は、より「客観的」である。しかしながら、主体が認識者としての自らについての意識を強く持ち、客体との間に結んでいる関係をも認識対象に含むような場合もある。このような状態における対象認識活動は、より「主観的」であると言える。このように、主観性および客観性の度合いは様々に変化するのである。

では、主観的關係と客観的關係とはどのようなものなのだろうか。まず、客観的關係とは、われわれが「対象」として認識し、高い認知的際だちを与える関係である。それは発話によって談話の相手に伝える内容となる関係であり、見立てのあり方にかかわらず「そこに存在している」と見なされる関係である。もちろん、厳密には、主体が存在していないとき、心的領域の中で関係が構築される見込みはなく、したがって、本質的には、客観的關係も主体の存在を前提としていると言える。しかし、重要なことは、客観的關係は、主体の概念領域の中で、主体自身とは切り離されて存在していると思なされるような関係だということである。つまりそれは、主体の概念領域という枠内において、主体自身を表す要素の存在を前提としない関係なのである。

一方、主観的關係は、あらゆる意味において主体の存在を前提としている。主体自身を表す要素のないところにそれは存在し得ない。主観的關係は、主体そのものと、主体によって認識された客観的關係との間に結ばれる関係である。そのため、主観的關係には、客観的關係に対して与えられるような認知的に高い際だちは与えられない。また、言語表現においても背景的な役割を果たすに過ぎず、主観的關係自体が発話の主な内容になるということはない。³主観的關係とは、いわば、発話の内容としての客観的關係に対して「見立て」を行う視線なのである。

それでは、客観的關係および主観的關係が参照点構造との間に持っているかかわりとはどのようなものなのか。これについて次の2.3.で考える。

2.3.2 種類の関係と参照点構造

図1のような参照点構造図式の中に描かれている2本の矢印は心的経路を表している。心的経路とは、認識者が対象を認識するためにたどる経路である。それゆえ、これらの矢印は、認識者の「視線」であると言える。参照点構造においては、認識者はまず、参照点となる要素へと視線を向け、次にその参照点の支配領域の中でターゲット要素を同定し、今度は参照点からターゲットに向けて視線を向けるということになる。

しかし、視線とは、本来の意味から言えば、認識者から直接向けられるものである。したがって、参照点からターゲットへの心的経路は、厳密な意味での視線ではない。また、参照点からターゲットへの心的経路が結ばれると同時に、認識者はターゲット要素を直接的に認識できるようになる。そのときには、参照点からターゲットへの心的経路は事実上不必要となる。したがって、これら2つの心的経路は、明らかにその性質において異なっていると考えられる。では、その違いはどのように定義づけられるのだろうか。

この問いに対して、参照点構造に含まれる2つの心的経路のうち、一方の経路は主観的關係であり、もう一方の経路は客観的關係である、というのが本稿の主張である。このことを例を用いて考えてみることにしよう。参照点構造を展開する表現として、英語の所有格表現がよく知られている。そこでここでは、Cathy's car という表現を用いる。この表現が展開する参照点構造において、Cathy は参照点、car はターゲットにそれぞれ対応する。参照点である Cathy は、認識者から直接の視線を受けている。したがって、認識者から Cathy へと向けられる心的経路

³ 話者が自分自身に関して言及するようなとき、主観的關係が発話の主な内容となっているように見える。しかし、たとえ自分自身についての事柄であっても、表現の対象となったならば、すでに主観的な関係ではなくなっている。それは「自分自身が構成要素である客観的な関係」に過ぎない。

は主観的な関係に他ならないと言える。一方、car は、談話領域に対して新たに導入される新要素であり、Cathy's car という表現が発話される以前には、認識者からの直接的な視線を受けていない。そこで、この表現が発話時には、Cathy という要素を手がかりに、car を同定する推論作業が起動される。その際、「Cathy が所有している自動車」あるいは「Cathy が乗ることになっている自動車」など複数の解釈が可能であるが、いずれにしても、Cathy's car という表現によって示されるのは、認識者が自らの見立てや判断に関係なく結ばれると想定する関係であることに変わりはない。したがって、参照点である Cathy とターゲットである car との関係は、客観的な関係であるということになる。

このように、参照点構造は、主観的関係と客観的関係という2種類の関係によって構成されていると考えられる。認識者と参照点要素との間には主観的関係が結ばれており、参照点要素とターゲット要素との間には客観的関係が結ばれている。それでは、このような参照点構造をどのように図式化することができるだろうか。次にこの問題について検討する。

2.4. 参照点構造の図式化モデル

上で提示された仮説に基づく参照点構造は下の図2のように図式化できる。以下、この図式の詳細について述べる。

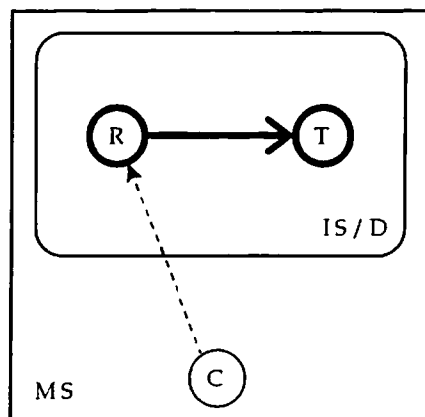


図2

まず、図式中の2つの長方形について説明する。外側の長方形は、最大叙述領域 (maximal scope of predication) を表している。最大叙述領域とは、言語表現の意味を決定する上で必要となるすべての要素をその内側に含む認知領域である。最大叙述領域には、表現の中心的な意味を担う(前景的)要素と、意味の周辺的な部分を担う(背景的)要素とが共に含まれる。次に、内側の(丸い角を持った)長方形は、叙述の直接スコープを表している。直接スコープとは、言語表現の意味に最も直接的に関係する要素すなわちプロフィール(profile)を内側に含む認知領域である。この長方形は同時に、参照点から展開される支配領域の広がりを見せており、そのため角が丸くなっている。

次に、最大叙述領域内の3つの要素について説明する。まず、Cと書かれた小円は、認識者を表している。認識者は、通常、言語表現による叙述の直接的な対象ではない。したがって、それは叙述の直接スコープの内側には位置しない。しかし、認識者の存在は、程度の差はあれ、言語表現に反映されて、意味の一部となる。それゆえCは、最大叙述領域の外側ではなく、その内側に位置づけられている。次に、Rと書かれた小円は参照点を表している。参照点となる要素はプロフィールを受ける要素であり、このことを示すためRは太線で描かれている。そして、Tと書かれた小円はターゲットを表している。ターゲットも参照点と同様、プロフィールを受ける要素であり、したがって、これも太線で描かれている。

最後に、それぞれの要素を結ぶ矢印についてである。これらの矢印は心的経路を表している。しかし、認識者と参照点を結ぶ矢印と参照点とターゲットを結ぶ矢印とは、図1とは異なり、同じようには描かれていない。前者は主観的な関係であることを示すため点線で描かれている。それに対して後者は、客観的な関係であることを示すため実線によって描かれている。

このように、図2では、2つの矢印を描き分けることにより、参照点構造に2つの異なる性質を持つ関係が含まれていることを明確に表している。次節以下では、この図式化モデルを用いて実際の言語現象の分析を本稿の仮説に基づいて行うことが可能であることを示す。

3. 英語定冠詞 the の参照点構造

この節では、前節で展開した仮説に基づいて英語定冠詞 the の分析が可能であることを示す。英語定冠詞 the の用法は、直接用法と間接用法とに分けることができるが、そのうち、間接照応は、明らかに参照点構造を持った用法として非常に興味深い。⁴そこで、ここでは特に the の間接照応に重点をおいた分析を示し、本稿の仮説を論証する。

3.1. 直接照応と間接照応

the の用法は、それによって導かれる名詞句 (the NP) の指示対象を特定するための情報がどのように得られるかによって分類できる。具体的には、同一の形式を持った名詞句によって (あるいは談話の場面において知覚できる実在として) 直接的に得られる場合と、推論によって間接的に得られる場合とがある。一般に前者の場合の the の用法を直接照応、後者の場合の the の用法を間接照応という。次の (1) の4つの文のうち、(a) と (b) は the の直接照応の例、(c) と (d) は間接照応の例である。

- (1) a. John bought a TV and a video recorder, but he returned *the video recorder*.
(Quirk et al. 1985: 267)
- b. Who's *the girl* over there with John?
(Swan 1985: 65)
- c. I lent Bill a valuable book, but when he returned it, *the cover* was filthy, and *the pages* were torn.
(Quirk et al. 1985: 268)
- d. They've just got in from New York. *The plane* was five hours late.
(Lyons 1999: 3)

(a) の the NP (the video recorder) の指示対象は、a video recorder という名詞句として前方にはっきりと現れている。(b) の the NP (the girl) の指示対象も、談話 (あるいはテキスト) の中では言及されていないが、発話の直接的状況において、視覚的にはっきりと認識できる実在として現れている。ここまでは、the の直接照応の例である。次に間接照応の例を見てみよう。

(c) の the NP (the cover/the pages) が指示する対象は、言語表現として明示的には現れていない。この名詞句の指示対象を特定するには、前方の名詞句 *avaluable book* に注目し、常識的な知識に基づいた推論を働かさなければならない。また、(d) の the NP (the plane) の場合も同様である。(d) の the NP の指示対象を特定するには、先行する文の内容に注目し、常識的な知識に基づいた推論を働かせる必要がある。

このように、英語定冠詞 the の用法には、直接照応と間接用法がある。このうち、特に間接照応は参照点構造を持っていることが明らかである。そして、その参照点構造の特徴は、本稿の「参照点構造は主観的關係と客観的關係によって構成されている」という仮説に基づいて自然に説明される。次にそのことについて論じる。

3.2. 間接照応の構造

the の間接照応は、主観的關係と客観的關係によって構成された参照点構造として表すことができる。前節で見たように、参照点構造は認識者・参照点・ターゲットという3つの要素を

⁴ 高橋 (2001) は the の間接用法を4種に分類し、それらを参照点構造の観点から分析している。

持っている。そして、認識者と参照点は主観的関係によって結ばれており、参照点とターゲットは客観的関係によって結ばれている。ここで、the の間接照応における先行詞を参照点とおき、the NP によって表される要素をターゲットとおく。すると、先行詞と the NP の間の関係の性質と、参照点構造における参照点とターゲットの間の関係の性質とが完全に対応する。

先行詞の指示対象と認識者との間の主観的関係は自動的に結ばれる。認知文法では、あらゆる言語表現は、グラウンディングという認知プロセスを経て発話されるとしている。グラウンディングとは、話者および聞き手が、認知領域上の客観的場面内に展開された要素との間に主観的な関係を結ぶプロセスである。したがって、先行詞が発話された時点で必然的に対象要素と認識者との間には主観的関係が生じると考えられる。

一方、先行詞と the NP との間の客観的関係は自動的に結ばれる関係ではない。この関係が結ばれるためには、認知主体の推論作業が必要となる。しかし、the を用いることは、先行詞と the NP が表す対象との間に何らかの客観的関係が存在することを前提とするため、この推論作業が行われることは必然である。この推論作業の結果、聞き手は、話者が「見立てにかかわらずそこに存在する」と想定した関係を心的に復元し、発話された言語表現の意味を理解する。

このような認知プロセスが実際の間接照応の用法においてどのように展開されるか、そしてそれをどのように図式化できるかについて、次にいくつかの例を用いながら考察する。

3.3. 間接照応の様々な例

the による間接照応は、参照点となる要素とターゲットとなる要素との間の客観的関係の客観性がどれだけ高いか（あるいは低い）によって様々に分けられる。ただし、「分けられる」と言っても、明確な境界線によって区分できるわけではない。参照点要素とターゲット要素との関係の客観性が非常に高い場合と、逆に非常に低い場合との間には、無段階的な連続性がある。そのため、ここで the による間接照応について考えられるすべての形について分析することはできないが、客観的関係の客観性の度合いが異なる3つの用例をあげ、2節で提案した図式化モデルを用いて分析できることを示す。

第1の例は、the の間接照応の典型的な形と言えるような例である。

(2) John bought a new bicycle, but found that one of *the wheels* was defective.

(Quirk *et al.* 1985: 267)

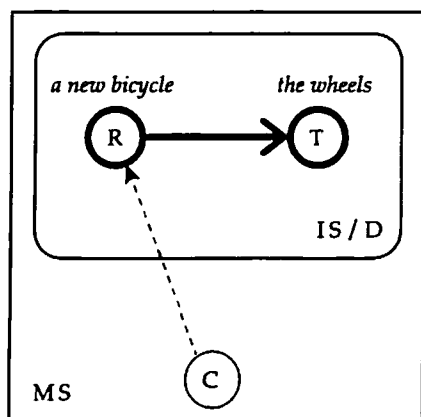


図3

(2)における the NP(the wheels) の構造は、図3のように示すことができる。図式中のCすなわち認識者は、もちろん文の主語である John ではなく、文の話者（および聞き手）である。認識者はまず a new bicycle を認識する。それによって、認識者と a new bicycle との間に主観的関係が結ばれる。次に認識者は、a new bicycle を参照点として、ターゲット要素となる the

wheels に対する心的接触を確立する。それに際して、参照点の a new bicycle とターゲットの the engine との間に客観的關係が結ばれる。この客観的關係がどのように結ばれるかは、次のように考えれば理解できるだろう。話者は、「自転車 (bicycle) には車輪 (wheels) がある」ということを知っている。そしてそのことを、主観的な見立てとは独立して存在する客観的な事実として見なしており、また、常識的な知識を有した誰もが理解している事実として見なしている。それゆえ、あえて「自転車には車輪というものがある…」という説明をすることなしに自転車と車輪という2つの要素についての叙述を行う。このような形で暗黙に想起される要素間の関係こそ、参照点構造における客観的關係に他ならない。

次に別の例を見てみよう。(3) は、参照点とターゲットとの間の關係の客観性が上の (2) ほど高くはない間接照応の例である。

(3) A fire broke out. But the cause was unknown.

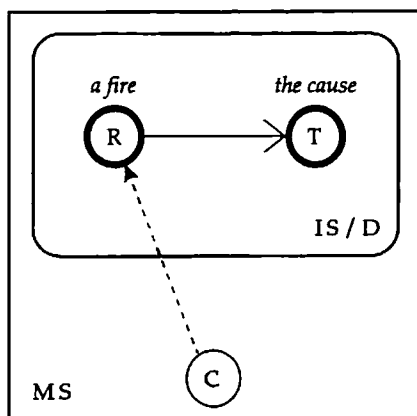


図4

この文における the NP(the cause) の参照点構造図式は図4のように示すことができる。この図でも、C は認識者すなわち話者と聞き手を表している。参照点とターゲットはそれぞれ a fire と the cause であり、両者の間には客観的關係が結ばれている。話者はこの關係が「主観的な見立てにかかわらずそこに存在する」關係であるという想定のもとに表現を行う。それに対して聞き手は話者のこの想定を無条件に受け入れ、推論作業によって参照点とターゲット間の關係を心的に再構築する。

しかし、この文の参照点構造における客観的關係は、先ほどの、a bicycle と the wheel との間の關係ほど「確実」なものではない。a bicycle と the wheel との關係は全体と部分の關係であり、両者は不可分の存在である。一方、a fire と the cause との關係は結果と原因の關係である。結果と原因とは密接な關係を持っているが、原因は結果の一部ではない。それらは2つの異なった概念要素である。そのため a fire と the cause との間の関連を見いだすためには、より高度な推論が必要となる。したがって、a fire と the cause との間に存在する關係の客観性は (2) の場合ほど高くはないと言える。このことを示すため、図4では、R と T との間の關係を表す矢印が図3のそれより細い線で描かれている。

さらに別の例を見てみよう。(4) は、(3) の場合とは逆に、参照点とターゲットとの關係がより高い客観性を持っている間接照応の例である。

(4) I met a man yesterday. The bastard stole all my money.

(Matsui 1993; 高橋 2001: 114)

図5の R と T はそれぞれ、a man と the bastard に対応している。両者は点線で結ばれているが、これは、a man と the bastard が同一の対象を指示していることを意味している。このように参

照点とターゲットが同一対象を指示していても、(4) おける the NP が参照点構造を持っていることに違いはない。なぜなら the bastard が表す対象を同定するには、a man が表す対象への認識が不可欠だからである。しかし、参照点とターゲットが同一の対象を指示しているということは、これらの間の関係がきわめて高い客観性を持っていることを意味する。この高い客観性を示すため、図5における R と T の間の関係を表す矢印は、図3や図4におけるそれよりも太い線で描かれている。

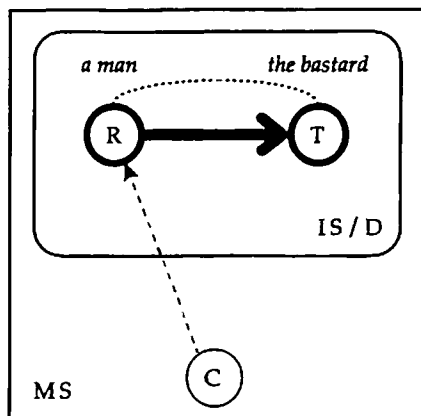


図5

3.4. 直接照応と間接照応の連続性

以上のように、the の間接照応の用法における客観的關係の性質は様々である。それは、全体と部分の関係である場合もあれば、結果と原因の関係である場合もある。あるいは、同一の指示対象を持つ2要素間の関係である場合もある。そして、参照点とターゲットとの関係の客観性の度合いも様々である。比較的高い場合もあれば、比較的低い場合もある。しかし、いずれの例でも、話者と聞き手が、「参照点とターゲットとの間に客観的な関係が存在している」という想定のもとに発話と発話解釈を行っているということは共通している。the の間接照応は、要素間の関係が「主観的な見立てにかかわらずそこに存在している関係」として見なされるときに可能となるのである。

実際には、聞き手が the NP という形式に反応して参照点構造を構築するのは、間接照応の場合だけではない。直接照応の the を含めて、the が用いられるすべての場合において、同じように参照点構造構築の構築が行われる。the の使用は、間接照応であるか直接照応であるかにかかわらず、常に参照点構造の構築を認識者に求めるのである。ただ、直接照応の場合には、参照点とターゲットの表現形式と指示対象が完全に一致しているため、聞き手は参照点とターゲット間の客観的關係を推論によって自ら見いだす必要がない。それゆえ、the の直接照応を分析する際には、参照点構造の観点からそれを捉える理論的必要性が低くなる。

直接照応の用例と間接照応の用例との間に、必ずしも明確な境界線は存在しない。両者はむしろ無段階的な連続性を持っている。このことを示す1つの証拠が、上で考察した(4)のような用例の存在である。(4)では、間接照応の典型的な例と同じように参照点とターゲットが異なる言語形式に対応している一方で、直接照応の例と同じように参照点とターゲットが同一の対象を指示していた。このような用例は、直接照応と間接照応のちょうど中間に位置するような例と見なすことができるだろう。

4. 日本語助詞「は」の参照点構造

次に、日本語助詞「は」を分析する。「は」の意味には、認識者と参照点との間の主観的關係と、参照点とターゲットとの間の客観的關係が大きく影響していると考えられる。このことを以下

に示し、本稿の仮説に対するさらなる論証を行う。

4.1. 「は」の参照点構造

「は」は参照点構造を構築する語である。「は」の次のような用例はいずれも参照点構造を持った言語表現として説明することができる。

- (5) a. 太郎はこの子です。
 b. 次郎は花子が好きだ。
 c. 今日は天気が悪い。
 d. 僕は日替わり定食。

(a)では、「太郎」が参照点となり、「この子です」がターゲットとなっている。(b)では、「次郎」が参照点となり、「花子が好きだ」がターゲットとなっている。(c)では「今日」が参照点となり「天気が悪い」がターゲットとなっている。(d)では「僕」が参照点となり、「日替わり定食」がターゲットとなっている。⁵

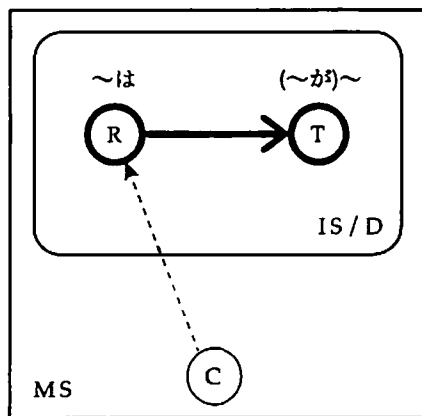


図6

これらの文における「は」の参照点構造は、おおよそ図6のように図式化できるだろう。まずCが話者および聞き手であることは、英語定冠詞theの場合と同様である。Rとなるのは、「は」が結びつく名詞句である。そしてTとなるのは「~は」句の後に続いて述べられる命題である。

「は」の用法は、3節で考察したtheの用法と同じく、様々に異なる。ところが図6は「は」の参照点構造の一般的な形に過ぎないため、実際に具体的な用例の図式化を行う際には、RとTの間の関係の客観性の度合いに応じて矢印の太さを描き分ける必要がある。例えば、(5a)では、参照点とターゲットとは同一の対象を指示しており、これら2つの要素はきわめて高い客観性を持った関係によって結ばれていると考えられる。したがって(5a)を図式化するには、RとTとは太い実線で結ぶべきである。一方(5d)では、参照点とターゲットとの関連づけに、認知主体による(談話文脈に基づいた)積極的な推論が求められる。これは、参照点とターゲットとの間の関係に、比較的低い客観性しか存在しないことを意味する。したがって、(5d)を図式化するにはRとTとを、より細い実線で結ぶべきである。

しかし、いずれにせよ、「は」は、おおよそ図6で表されるような参照点構造を展開し、次のことを行う。すなわち、まず、文のトピックとなることができる要素を提示する。そして次に、トピック要素に関連する何らの命題が述部において述べられることを聞き手に期待させる。

それでは、「は」の参照点構造は、本稿の仮説の通り、主観的關係と客観的關係によって構成

⁵ここで、ターゲットとなる命題がどのような形式をとっているかは問題ではない。「~する」「~が~する」「~だ」「~が~だ」など、どのような形式で構成されていても、それは、1個の概念要素として機能する。

されているのだろうか。そして、もしそうであると考えたら、その理論的根拠はどのようなものか。次にこのことについて論じる。

4.2. 「は」の参照点構造における主観的関係と客観的関係

「は」の参照点構造内にも主観的関係と客観的関係とが存在している。「は」の参照点構造が主観的関係と客観的関係によって構成されているとする理論的根拠については、以下のように考えられる。

まず、「は」の参照点構造における主観的関係についてである。「は」と結びつく名詞句は、通常、話者と聞き手との間ですでに了解されている要素を表す。したがって、多くの場合、「は」が用いられるとき、主観的関係はすでに構築されている。例えば、「これは何ですか」という文が発話されたとき、「これ」が表すのは、すでに話者と聞き手との間で了解された要素である。場合によっては、「は」と結びつく要素が、その発話の時点において聞き手には了解されていないこともある。しかし、そのような場合でも、「は」が用いられたという事実が契機となって、聞き手は、「は」と結びついた名詞句をあたかもその時点ですでに了解されている要素であるかのように扱うことができる。したがって、「は」と結びついた名詞句(参照点)と認識者の間には、自動的に主観的関係が結ばれると言える。

次に、「は」の参照点構造における客観的関係についてである。すでに述べた通り、「は」の参照点構造では、「は」と結びつく名詞句が表す要素が参照点となり、「～は」の後に続く述部が表す命題がターゲットとなる。これら2つの要素間の関係が客観的な関係であることは次のように考えると理解できるだろう。ここで、例として「太郎は花子が好きだ」という文を用いる。この文が展開する参照点構造における参照点は「太郎」、ターゲットは「花子が好き」である。文の中で「太郎」と「花子が好き」の間の関係の詳細は明示的に表されていない。そのため、聞き手は(可能性として)この文を様々な解釈できる。例えば「太郎が花子のことを好んでいる」とも「太郎のことを花子が好んでいる」とも解釈できる。しかし、通常、話者と聞き手の間では特に誤解が生じることなくコミュニケーションが成立する。それはなぜか。「太郎」と「花子」の間に、わざわざ明確に述べなくても文脈を参照することによって正しく理解されうるような客観的な関係が存在しており、話者がこのことを想定していることが、「は」の使用によって聞き手にも理解されるからである。⁶したがって、「は」を含む参照点構造を展開する語は、発話理解のために文脈を参照することを聞き手に指示する働きを持った言語表現であるとも言える。

4.3. 「は」と the の共通点

以上見てきたように、「は」と the と同様、参照点構造を展開する語である。「は」や the が文の中で使用されると、それをきっかけに聞き手は、認識者・参照点・ターゲットという3つの要素を含む参照点構造を心的に構築する。その際、認識者と参照点は主観的関係で結ばれ、参照点とターゲットとは客観的関係で結ばれる。このような構造上の共通性により、「は」と the は、意味の上でも2つの共通点を持っている。

第1の共通点は、参照点構造における客観的関係の存在に起因するものである。参照点となる要素とターゲットとなる要素との間の客観的関係のあり方が多様であるために、「は」と the には、異なった様々な用法が存在する。例えば、「は」の用法は、「太郎はやさしい」「ピーマンはきらいだ」「僕はカレーライスだ」「大阪は雨だ」のように様々である。また、the の用法も多様である。3節で見たように、the NP の指示対象とその先行詞となる表現の指示対象とは、全体と部分の関係にある場合もあれば、原因と結果の関係にある場合もあり、さらには、同一

⁶ここで言う「客観的な関係の存在」とは、「～は～」という構造を持った表現によって表される内容がすべて客観的な「事実」として存在しているということを意味しているわけではない。「～は～」表現は、話者の憶測を述べるためにも、空想上のことを述べるためにも用いられる。重要なのは、「は」の参照点構造における参照点とターゲットとの間の関係は、「特に詳細に説明しなくても文脈を参照することによって聞き手にとって構築可能」だと話者が想定するような関係だということである。

である場合もある。このように、「は」と the は共に、きわめて多様な用法を持っている。⁷

第2の共通点は、主観的關係が持っている性質に起因する。主観的關係は定義上、プロファイルを受けない。プロファイルを受けないということは、それ自体が表現の中心的内容にはならないということである。例えば、「この本はとても面白い」という文では、「は」によって展開される参照点構造内には主観的關係が存在しており、それゆえ認識者である話者の存在は背景的な要素としては意味に関与している。しかし、「この本はとても面白い」という文が中心的に表すのは、「この本＝とても面白い」という命題であり、認識者(あるいは話者、あるいは「私」)自身や認識者によるその命題を認識する行為それ自体ではない。the の場合も同様である。例えば、When we're using a computer, *the machine* becomes an extension of our brain. という文で、the が展開する参照点構造における主観的關係が意味の上で重要な役割を果たしていることは事実である。しかし、この文が表す中心的内容に認識者(あるいは話者、あるいは「I」)自身や認識者による認識行為自体が含まれているとは言えない。このように、「は」と the は共に、言語表現の内容となる要素自体を表すのではなく、内容と認識者の間に存在する関係を表すことによってのみ、表現の意味に寄与している。

以上、「は」と the の共通点について論じたが、「は」と the の参照点構造には相違点も存在する。例えば、「は」あるいは the に結びつく名詞句が参照点構造中のどの要素に対応するかという点について、両者は大きく異なる。「は」の場合、結びつく名詞句は参照点となる。そして、それに続いて述べられる命題がターゲットとなる。これに対し、the の場合は、結びつく名詞句がターゲットとなる。the の参照点構造で参照点となるのは、多くの場合、先行する文脈の中に存在する特定の要素である。ただし、このような相違は、「は」と the という語彙の構造における違いであると同時に、日本語と英語それぞれの談話展開における情報構造の構築パターンに起因する違いでもあると思われる。したがって、この問題に関する詳細な説明は、より広い視野を持った分析の結果を待たねばならない。

5. まとめ

本稿では、われわれの言語活動およびそれを支える様々な心的活動において大きな役割を果たしている参照点構造は質の異なる2つの関係によって構成されているという仮説を示した。その2つの関係とは、認識者と参照点との間に存在する主観的關係と、参照点とターゲットとの間に存在する客観的關係である。また、この仮説を論証するために、参照点を展開する語である英語定冠詞 the と日本語助詞「は」の参照点構造が主観的關係と客観的關係によって構成されていることを示した。

the と「は」以外にも、参照点構造を展開する働きを持つ言語表現は数多くあると考えられる。参照点構造は主観的關係と客観的關係により構成されているという仮説が正しければ、それらすべての表現には何らかの共通する特徴が存在しているはずである。今後のさらなる研究により、多くの言語表現の普遍的な構造が参照点構造の観点から発見・解明されることが期待される。

参考文献

Langacker, Ronald W.

1985. "Observations and Speculations on Subjectivity." in John Haiman (ed.) *Iconicity in Syntax*, 109-50, Amsterdam: John Benjamins.

1987. *Foundations of Cognitive Grammar. Volume 1, Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.

1990. *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.

⁷ 英語の所有格表現もまた、the や「は」と同様、参照点構造を展開する言語表現であり、そのため2つの要素の間に存在する様々な種類の関係を表すことができる。例えば、John's picture という表現は、「ジョンの所有する写真」「ジョンが撮影した写真」「ジョンが写っている写真」など複数の解釈が可能である。ちなみに、英語所有格表現を参照点構造の観点から分析した研究として、Taylor(1996)は非常に興味深い。

1991. *Foundations of Cognitive Grammar, Volume 2, Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.

1999. *Grammar and Conceptualization*. Berlin: Mouton de Gruyter.

Lyons, Christopher

1999. *Definiteness*. Cambridge: Cambridge University Press.

Matsui, Tomoko

1993. "Bridging Reference and the Notion of 'Topic' and 'Focus.'" *Lingua* 90, 49-68.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik

1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

Swan, Michael

1985. *Practical English Usage*, Second Edition. Oxford: Oxford University Press.

Taylor, John R.

1996. *Possessives in English: An Exploration in Cognitive Grammar*. Oxford: Oxford University Press.

高橋英光

2001. 「英語の間接照応 — 認知文法の観点から —」、山梨正明他(編)、『認知言語学論考』、pp.111-142、ひつじ書房。

山梨正明

2000. 『認知言語学原理』、くろしお出版。